

集落内の合意形成による地域づくりと営農組織の育成

～集落機能の再構築と元気が出る地域農業を目指して～



経営体育成基盤整備事業

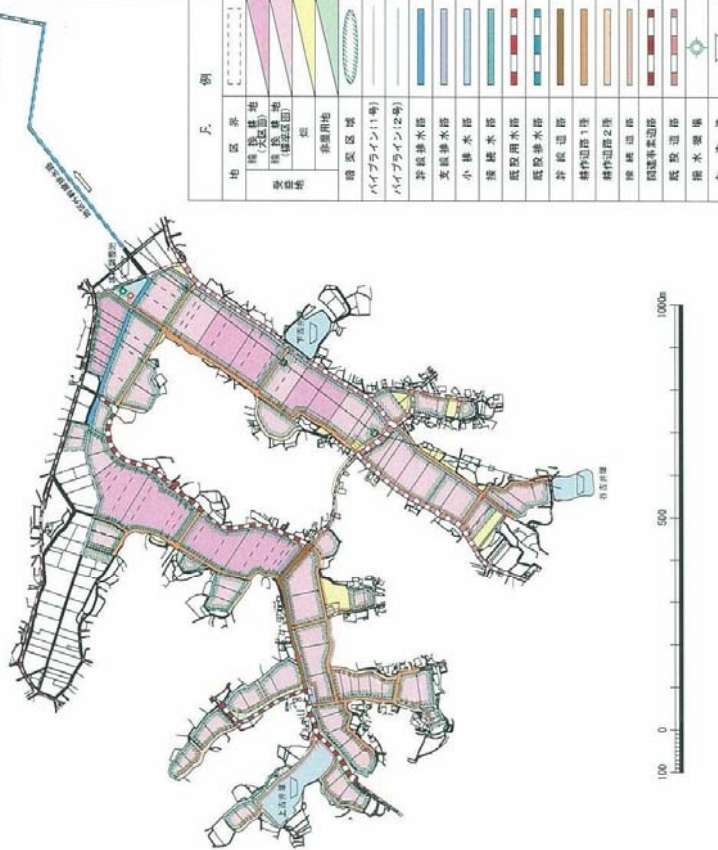
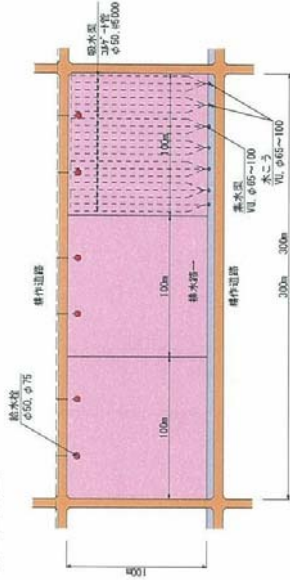
吉井地区

長生農林振興センター

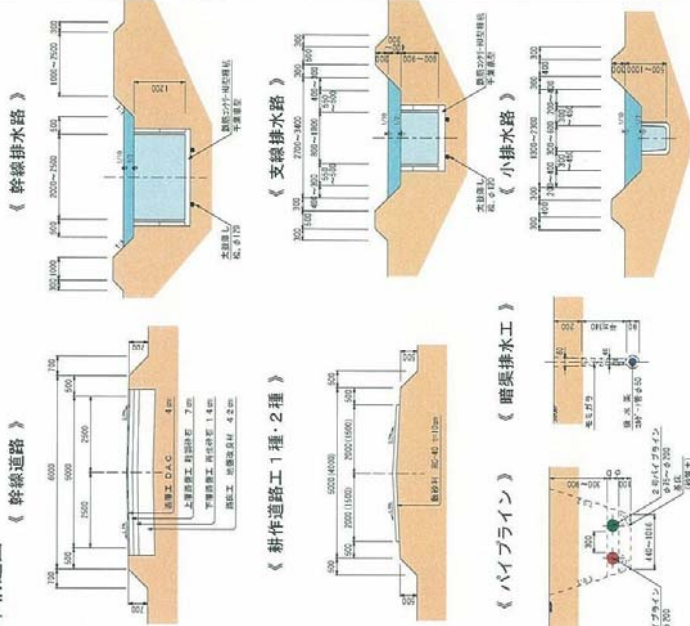
計画一般平面図 (変更後)



標準区画分割図



標準構造図



1 茂原市の概要

茂原市は房総半島のほぼ中央、九十九里平野の南端で、長生地域においては、5町村と境を接する郡内のほぼ中心に位置しています。

総面積は100.01km²で、東西に11.7km、南北に13.1kmの広がりを持っています。

地勢は、主に西部は房総台地につながる丘陵地、東部は九十九里浜につながる平坦な沖積平野となっています。

世帯数36,577戸、人口は94,470人(H19.1.1現在)です。

(1) 茂原市の農業

農地面積は3,788haで、うち田は2,474ha、畑は1,314haで、主に西部はなだらかな丘陵地、東部はほぼ平坦地の農地となっています。

農家数は2,021戸で、全世帯数のうち約5.5%にあたりますが、年々減少傾向にあります。農家の経営形態は、水稻・野菜の複合経営が多く、その経営規模は平均1haと小規模経営体が主流となっています。専業別にみると、第2種兼業が56.5%で大半を占め、以下専業が13.5%、第1種兼業が7.7%となっています。

農業産出額(16年産)は59億8千万円で、内訳は米20億7千万円、野菜20億7千万円で約7割を占め、以下畜産、花き、雑穀・豆類と続きます。なかでも本納地区を中心に作られているねぎは、県内7位の産出額で、この9月には新たなブランドとして「長生のミニねぎ」の出荷販売が始まりました。

2 導入された事業の概要

(1) 経営体育成基盤整備事業 吉井地区 (平成12年～19年度)

ア 事業主体 千葉県

イ 受益面積 32ha

ウ 事業期間 平成12年度～平成19年度

エ 総事業費 704,400千円

オ 事業概要

整地工 30.6ha

用水路工 7.7km

排水路工 6.2km

道路工 5.5km

暗渠排水工 29.3ha

用水機 2台

(2) 関連事業

なし

3 事業の成果

(1) 直接的な成果

当地区のほ場は、谷津合いのため小区画の湿田で水稻しか作れませんでした。用水は地区内3箇所のため池を水源としていましたが、土水路や田越えによるかんがいのため、効率的な利用が出来ず、常に用水不足への対策が必要でした。排水路は狭小で、一部には田越え排水のほ場もあったため、頻繁に湛水被害を受けていました。農道は未舗装のうえ狭小なため車両の通行に支障を来たしていました。

本事業で、ほ場を30a以上、最大1ha区画の大区画に整備することにより、作業効率は向上しました。ほ場内には暗渠も設置され、乾田化が図られ水田での新たな作物の導入が可能となりました。

用水は既存のため池を水源としますが、揚水ポンプやパイプライン等により、ロスが少なく反復利用可能な用水システムを作り上げることにより、用水不足の不安は解消されました。

排水路は全てのほ場に接続され、10年に1度の大雨に対しても湛水を4時間以内に排除されるようになりました。なお、舗装された排水路には小動物が水路から退避できるような配慮もされています。

幹線農道は拡幅舗装され通行の安全が確保され、大型農業機械の通行も可能となりました。

基盤が整備されたことにより、営農に対する不安が払拭され、大型機械化によるコストの削減、新たな作物の導入が可能となりました。



大区画ほ場

(2) 営農組織の設立

この基盤整備を契機に、集落内の合意に基づいた地域農業の担い手の育成・確保と、集落機能の再構築と地域農業の維持・発展に向けた営農ビジョン作りを行った結果、担い手として農業生産法人である有限会社「アグリテック441」が設立され集落営農に向けた活動が始まりました。

具体的には、水稻以外の作物の経済的栽培の経験が少ないなかでの、トウモロコシ生産と販売、草刈作業軽減のためのカバープランツの導入、大型機械導入に向けた大型特殊免許の取得等、作業受託一辺倒から、生産・加工・販売および農地の取得を含めた事業に取り組む法人経営がスタートしました。

(有)アグリテック441の概要

- ①設立年月日 平成15年8月8日（設立と同時に法人化）
- ②目的 集落内の農地を集積し、水稻及び野菜を生産する
- ③構成員 6名
- ④所在地 茂原市吉井下646
- ⑤所有施設及び機械

ア 乾燥施設

- ライスセンター 1箇所
- 乾燥機（50石 2台、30石 1台）
- 籾摺り機（5インチ 1台）
- 米選機（1台）

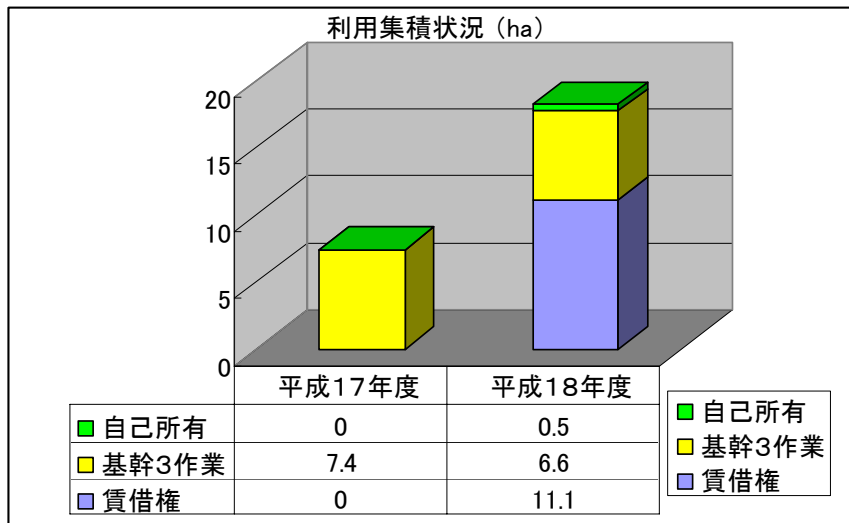
イ 機械

表-1

機 械 名	規 格	台 数
トラクター	60ps	1
ロータリー		1
ウイングハロー		1
ブロードキャスト		1
田植機	6条植え	1
コンバイン	5条刈り	1

(3) 利用集積

平成17年度から農地の利用集積が本格的に始まり、アグリテック441と1名の個人の担い手が受け手となりました。当初は4名の担い手農家へ13haの集積を予定していましたが、より信用度が高く持続性のある有限会社が担い手となったことから、貸し手側農家にも安心感を与え、利用集積は一層に進んでいます。その結果、平成18年度には地区内の6割強が集積されることとなりました。



(4) 新規作物の導入

集落全体で取り組める転作作物として、平成14年より以下の作物に取り組んできました。

平成14年、15年は区画整理工事中だったことから、栽培が容易で景観作物として優れているヒマワリのみを導入でしたが、区画整理が終わりほ場条件が良くなった平成16年からは、新たな作物の導入が可能となりました。

検討の結果、土地利用型作物で比較的需要も高く、栽培も容易なことからえだまめととうもろこしが選定されました。特にトウモロコシは長生地域での栽培面積も少なかったことから、地域内一番の産地化を目指し選ばれました。

表-2

(単位：ha)

年度	ひまわり	えだまめ	とうもろこし	計
H14	14.7	—	—	14.7
H15	16.8	—	—	16.8
H16	2.4	1.4	2.4	6.2
H17	4.0	1.1	1.1	6.2
H18	2.4	3.0	2.0	9.4



とうもろこし



食用なばな

また、より高い収益を求め水稻の裏作として食用なばなを、平成17年に5aの試作をし、平成18年には大区画ほ場2haで栽培しました。食用なばなは事前値決めで有利販売が可能なおうえ、収穫・出荷調整が簡易で軽作業なため、集落内の高齢者や女性の労力が活用できることから導入されました。

食用ナバナは種期別品種構成一覧表

① 品種別は種期と収穫期 ○は種期 ●収穫期

月旬	種期別品種構成									
	8	9	10	11	12	1	2	3	4	
品種	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
早生	春華	(8/20~9/15)		(10/下 ~ 12/下)						
	春雷	(8/20~9/15)		(10/下 ~ 12/下)						
	健康		(9/20~9/30)		(11/下 ~ 1/下)					
中生	花飾り		(9/25~10/10)			(12/下 ~ 3/上)				
	CR花かんざし		(9/15~10/15)			(12/中~1/下)				
	花娘		(9/10~10/10)			(12/中 ~ 3/上)				
晩生	(伏見縮緬88号)		(9/25 ~ 12/10)			(1/下 ~ 4/下)				
						(1/20~3/10)		(4/上~下)		

(5) 地域交流



担い手組織の経営基盤作りを目指し、かつ地域住民に地元農業の維持・発展を意識してもらうため、非農家も含めた集落全戸に声をかけ、平成14年8月に「もろこし&ひまわりフェスタ」が開催されました。多くの住民の協力を得ながら、毎年夏に開催され地域行事として定着しています。

フェスティバルではひまわり、とうもろこし、えだまめの収穫体験ができ、子供たちに好評を博しています。また、直売も行われ市外からの来客もあり、生産量のほとんどがこのフェスティバルでさばっています。

5回目の平成18年は、7月22日、23日に開催され、知事をはじめ延べ3千名の来場者で賑わいました。



ひまわり&もろこしフェスタ会場の様子

4 今後の課題と改善方法

今後も、更なる農地の利用集積の推進を図りながら、効率的で安定した経営基盤を確立し、イベントでの集客、農産物の加工、産直を行うことにより農家、地元住民、消費者との交流による農業の活性化を目指すこととなります。

そのためには、中核となるアグリテック441の経営基盤が安定することが不可欠ですが、周年で売れる作物の導入、安定的な販売ルートの確保、営農技術の確立、組織運営のノウハウの蓄積、将来の経営を見据えた人材の確保が必要であろうと思われま

5 その他

(1) 調査協力機関

ア 茂原市農政課

イ (有)アグリテック441